

1. 同一のものと考えますが、何故特異的に一定の硬組織のみを吸収するかわかりません。
2. 現在のところ、間葉系由来、単球由来、線維芽細胞由来等種々の見解がありますが、破歯細胞の由来を何に求めるかは未だ不明です。

演題4. 雌雄マウス顎下腺アンドロゲン・レセプター
の細胞ならびに核内分布について

○太田 稔, 客本 斉子, 黒川 理樹,
馬場 利恵, 根本 孝幸, 根本 優子,
佐藤 詔子

岩手医科大学歯学部口腔生化学教室

〔緒言〕マウス顎下腺は、アンドロゲン依存性臓器であり、その細胞質にはアンドロゲン・レセプター (AR) が存在し、その含量は雌が雄より有意に高値を示す。本研究では、雌雄顎下腺細胞核よりARを抽出し、exchange法により、核内のARを測定し、さらに細胞質ARをも測定し、ARの細胞内分布について検討した。

〔方法〕雌雄d d Yマウスの顎下腺をTris-HCl緩衝液でホモゲナイズ後、150,000xgで遠心し、その上清を細胞質レセプターとして用いた。一方、核レセプターは、顎下腺をhexylene glycol緩衝液でホモゲナイズして均質液を得、これを1,500xgにて遠心して核ペレットを得、この中に含まれる核レセプターをpyridoxal 5'-phosphateにより抽出することにより調製した。この抽出液を核レセプターとして用いた。なお、この際用いるpyridoxal 5'-phosphateの最適濃度についても検討した。細胞質ならびに核レセプターを2.5nM [³H]-R1881と結合させた後、hydroxyapatite法により、リガンドと結合したレセプター量を測定した。

〔結果〕顎下腺細胞核に存在する核アンドロゲン・レセプターは5mM pyridoxal 5'-phosphateにより抽出された。雌雄共に細胞質レセプターは0°Cで短時間で [³H]-R1881との結合が飽和に達するのに対し、核レセプターは0°Cでは極めて徐々にexchangeが起こり、最大結合に達するのに50時間程かかった。細胞質レセプターの結合部位数は雌で有意に高値を示したが、核レセプターの結合部位数は、雄で高値を示した。

〔結語〕マウス顎下腺アンドロゲン・レセプターの細

胞内分布には性差があり、雄ではその88%が核内に存在し、アンドロゲン結合型である。雌では、89%が、細胞質に存在し、アンドロゲン非結合型であった。

質問: 武田 泰典 (口病理)

1. 細胞質内にとり込まれてから核に入る迄の経路
2. 細胞質内に存在するものについて、その局在性

回答: 太田 稔 (口生化)

1. cytosol receptor が cellular membrane から nuclear membrane へ移行する際の通路はきまらなかったものはない。
2. cytosol receptor の cytosol 内での局在性はない。

演題5. Streptococcus mutans 菌株のフッ素感受性の比較

○稲葉 大輔, 飯島 洋一, 宮沢 正人,
田沢 光正, 片山 剛, 長田 斉*

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座
東京都大森保健所*

Str. mutans はフッ素に感受性を示し、フッ素によってその酸産生あるいは増殖が抑制されることが知られている。一方、本菌のもつ諸性状が本菌を分類する際に常用される血清型あるいは遺伝子型とよく一致することから、Str. mutans のフッ素感受性も血清型あるいは遺伝子型に対応するのではないかと考えられる。この対応を明らかにする目的で本菌のフッ素感受性がこれらの型別ごとに共通するか否かを検討した。

血清型 a~g よりそれぞれ2~3株を選択し、計16株の Str. mutans を供試した。seeds culture の1.0 ml を、initial pH 7.0あるいは6.0に調整した10ppm F添加 trypticase soy broth 100ml に接種した。37°Cで好氣的に静置培養することにより増殖の程度をO.D. (550nm)により接種時から2時間おきに12時間モニターした。なお、F非添加のものをコントロールとした。initial pH 7.6, 6.0ともに8時間目のO.D. が増殖の差異を最も鋭敏に示す(S/N比)ことから、8時間目のO.D. フッ素感受性評価のための指標とした。initial pHの条件別に血清型、遺伝子型をそれぞれ要因とする分散分析を行ったところ、Str. mutans のフッ素感受性の相異と血清型ないし遺伝子型との間に明らかな関連は認められなかった(P<0.01)。また、今回供試した全16株の間で多重比較検

定 (Newman Keuls Test) を行った結果, 血清型 C を除いて, 同一血清型に分類される菌株の間にも有意差のあることが認められた。

以上のことから Str. mutans のフッ素感受性は血清型あるいは遺伝子型に対応するものではないことが示唆された。

演題 6. 血圧の動揺性と血中カテコールアミン

◦高橋 栄司, 小沢 正人*

岩手医科大学歯学部内科学
岩手県立一戸病院*

〔目的〕 本態性高血圧の発症・病因からみたカテコールアミン・交感神経系の役割は, 古くしてかつ新しい課題の1つである。正常血圧者および高血圧者の尿中・血中カテコールアミン濃度測定比較に関する諸家の研究報告があるが, いま1つ明確な結論が得られていない。それは, 高血圧が均一な病態を示すものではなく, 加齢・血管反応性あるいは病期, 他の昇・降圧因子との関連らが複雑にからみあっているためと考えられる。そこで今回, カテコールアミンが高血圧者で特異な動態を示しているか否かのテーマではなく, 内因性カテコールアミンが, 血圧特にその変動ないし動揺性とどのような関連性をもっているかを, 基本的に, 見直す必要があると考え研究を行った。

〔対象と方法〕 高血圧者5名, 境界域高血圧者2名, 正常血圧者18名(男12, 女13名, 平均年齢50.6±13.9歳)の新患患者を対象とした。

外来初診時座位血圧 (casual B.P.) を測定, その後約1時間安静臥位で ECG 記録しながら基礎血圧 (basal B.P.) を測定し採血した。血液はカテコールアミン (ドーパミン, ノルアドレナリン, アドレナリン) の定量に供した。

〔結果〕

1. ノルアドレナリン量と△平均血圧, △拡張期血圧が正の相関を示したが, △収縮期血圧とは相関が認められなかった。
2. アドレナリンおよびドーパミン量と血圧変動 (△平均, △収縮期, △拡張期血圧) とは何ら相関が認められなかった。

このことは, 安静時血漿ノルアドレナリン分泌量の多い者ほど, ストレス (特に精神的) によって拡張期血圧が上昇することを示唆している。

演題 7. 予診新患登録者数の月変動と長期変動について

◦小川 光一, 戸塚 盛雄, 一戸 孝七*

岩手医科大学歯学部歯学予診室
岩手医科大学教養部数学科*

今回われわれは, 今後の外来患者の実態を予測する目的で, 昭和41年5月より59年12月までの18年8か月間における, 各月の1日平均予診新患登録者数を調査し, 月別変動および長期傾向について検討した。月変動を検討する手段として, 長期傾向による変動の混入を避けるため Persons の連環比率法を用い, 月変動指数を求めた。1月, 3月と8月に新患数のピークがみられ, この背景をさぐるため, 医療費の負担区分および健康保険の種類別に昭和56年から59年までの新患数を集計し, 月変動指数を算出した。4年間における年間の新患数は, 私費 (矯正) が600人, 国民健康保険と社会保険と社会保険の家族が各々1,300人, 社会保険本人が1,100人, 私学共済および本学学生が400人, 老人医療とその他が各々150人でした。これらの月変動指数は, 私費が1月, 3月と8月に, 国民健康保険が1月, 3月, 9月に新患数のピークがみられた。社会保険は8月から12月まで減少傾向が続いており, 私学共済および本学学生では4月, 8月と10月に減少がみられ, 老人医療関係では4月, 6月, 9月と10月に新患数のピークがみられた。さらに, 月変動指数により調整すると, 老人保健法施行 (昭和58年2月) と社会保険本人1割自己負担実施 (59年10月) による新患数の変動がないことを示した。新患数の長期変動は, 昭和50年まで増加し, 50年から52年まで激減し, 53年以後は, 57年に明らかな減少がみられる以外, 不変または微増でした。今後の長期的傾向を予測するため, 県内を6地域に区分し, 50年から58年の毎年の子診新患総数と人口10万人対歯科診療所数の推移を検討した。その結果, 50年から53年までは県内の歯科診療所の増加が当病院の患者減少要因であったと思われるが, 54年以後は患者減少の要因ではないと思われる。以上より, 今後の新患総数の長期傾向は, 減少しないと推定する。

質問: 田沢 光正 (口腔衛生)

盛岡市の開業医が増加していく中で, ここ1・2年の盛岡市からの新患数が増えているのは選択に困り大きな病院なら問題なからうということでは来院している